

「山形いのちの電話」設立に 生命を燃やしきった石塚先生

山形いのちの電話理事・後援会会長 本 間 利 雄

「山形いのちの電話」が10周年を迎える記念事業の一環として、記念誌をつくることになった。後援会会長として原稿を求められ、あげく編集委員や事務局長から催促を受けてしまっている。この10年を振り返ると、設立に向けて盡力された山形大学名誉教授（生物学）の石塚和雄先生の存在がとてつもなく大きい。そのことを記念誌に遺したいと、設立のころへと記憶をたどってみた。

1993年6月10日、石塚先生と初めてお会いした。「『山形いのちの電話』を設立したいので協力してほしい。隣の宮城県では、すでにいのちの電話でいろいろな活動をしている」と。さらに「いのちの電話」の国際的な活動についてもお話を伺い、何も知らなかった私はただただうなずくばかりだった（石塚先生と、山形組専務の梅津尚さん、現理事の境澤栄美子さんもご一緒であったように記憶している）。

石塚先生のいのちの電話にかける情熱は、ただ事ではなかった。強い信念が凝縮され、私に迫ってくるような恐ろしい力を感じたように記憶している。これは何か強い信仰を持っておられるからではないかと思った。

力不足でお役に立たないだろうと遠慮しながらも、多少悲壮な覚悟でお引き受けした。その条件として、後援会長に田中哲さん（山形県芸術文化会議会長）を推薦申し上げ、その場から田中さんに就任のお願いの電話を入れたのであった。たぶん田中さんにとっても迷惑なことだったろう。しかし後日、「私でよかったら」と快諾してくださったので、「これで何とかいける」と大きな後ろ盾を得たように喜んだ。

石塚先生の再度の訪問を受けたのは、1993年11月30日。たしか翌年10月1日の開局に向けて、いろいろご努力されていることをお伺いした。中でも一番の問題は、資金であったと思う。年間1千数百万円の経費をどうつくれるか、また社会福祉法人としての基金をどうするか。先生にとってとても大きな負担で、そのご心労はいかばかりであったことかと、今更ながら考えさせられる。

1994年10月1日、「山形いのちの電話」を田中理事長・石塚事務局長のもとに開局することができた。石塚先生の努力が報われたのだ。

それから半年後の1995年3月7日、石塚先生のお見舞いに山形大学付属病院を訪ねたと私の事務所の記録にある。追憶を重ねると、病室に通されたとき、先生はご家族の皆さんと談

笑されておられた。そして私に、「いのちの電話をよろしく頼みますよ」と笑顔を見せてくださった。

近く元気に回復されることを祈っていたが、「山形いのちの電話」設立に向けてのご盡力とその過労されての病気からか、石塚先生はその年の7月1日にお亡くなりになられてしまった。私には「山形いのちの電話」にかけられたご生涯であったように思えてならない。

日本キリスト教団山形六日町教会でお別れの葬儀が行われ、先生がキリスト教に信仰を持っておられたことを知る。教会の中に流れる讃美歌や奏楽の曲の響きに緊張とともに畏れを感じ、召された石塚先生の御霊に「天翔けて『いのちの電話』を見守ってください」と祈るばかりであった。(その後、石塚先生の奥様より多額の献金をいただき、それが「社会福祉法人山形いのちの電話」の基金となっている)

たくさんの方々のお支えをいただき歩んでこられたこの10年、心より感謝し、いつまでも多くの方々によって「山形いのちの電話」を育ててくださることを心から願い、祈っていきたいと思っている。

いのちの大切さ ～学校の中で学ぶ～

山形いのちの電話理事 助 川 暢

4月、学校は大変忙しい毎日が続きます。私たちの学校では、入学式の前日に新入生と校長の間で、「3年間どのように生活するか」という契約(約束)を、ご父母に立ち会っていただいて結びます。このようにして、一人ひとりが心に決意して入学式を迎えます。

2、3年生とは、入学式を終えて一段落した1週間後から、1晩に3～4人ずつ、昨年度の反省や、新年度を迎えて考えていること、将来のことなどいろいろ話し合います。今年度の3年生からは、「来年3月の卒業でこの学園生活は終わる。それまでの一日一日を大切にしていきたい」という気持ちが強いことが窺えました。

下旬には、小国町の「健康の森」のバンガローを活用して、1年生が早くお互いのコミュニケーションが取れるようになることや、これからの学園生活の方向をしっかりとさせることを願って1泊修養会を行います。全寮制の学校で、いつも一緒の生活をしているのですが、同期の者だけで計画し、実施する企画はとても楽しそうで、食事づくりも好みのカレーの辛さでグループ分けするなど、ユニークな発想も出てきます。2、3年生も日程を調整して計画し、職員も交代でできるだけ多く参加するようにしています。このような体験を重ねて友達との交流をより深め、友達存在の大切さ、自分の大切さ、いのちの重さを体で実感して